

◇ 5月の天文暦 ◇

日	時	記	事
2	17	水星 留	
	17	上 弦	
6	6	月 最遠	
	13	立夏 (太陽黄経 45°)	
10	20	望	
17	21	土星 合	
18	2	水星 西方最大離角	
	5	下 弦	
22	2	小満 (太陽黄経 60°)	
	2	月 最近	
23	18	木星 衝	
24	22	朔	

A. ウンゼルト

ドイツ人 (1905-)。写真を見なくとも、もうかなりの高齢だろうと誰もが思う。天体物理学を学んだ人は、どこかで、彼が書いた厚ぼったいドイツ語の本にお目にかかっている。この本の標題は「恒星大気の物理学」。1930年代に書かれてから今もって多くの人々に読まれている。

私達は恒星を光点とみなして、その明るさ、位置、運動を調べることができる。その光をさらに分解してスペクトルを撮ることにより、気体球としての星の物理・化学的な構造を調べることができる。星の中心部まではとても見透せないで、直接得られる情報はまず「大気」と呼ばれている表面の薄い層についてのものに限られる。「恒星大気の物理学」には、その分析方法が詳しく論じられている。この理論をもとに、スペクトル解析からいろいろ星の表面の温度・圧力・化学組成などが知られた。

彼はもともとゾンマーフェルト学派の原子物理学者である。電磁波と原子の相互作用の研究から、線スペクトルの研究に進み、その成果を太陽・恒星の大気に応用し最近では銀河系の進化について興味深い仮説を提案してい

る。研究者としてのウンゼルトは古典派で、電子計算機はあまり好きではない。続々と計算機から吐き出される数字の列を理解するのは結局人間である。計算機のできる仕事は知れたものかと言っていたが、今もってその信念は変わっていないようにみうける。



先生としてのウンゼルトはなかなか手厳しい。原理を把握することが大切で、物識りである必要はあまりないという。「恒星大気の物理学」に目をとおしたことのある人なら、その詳細な文献引用に驚いたはずである。彼自身の記憶力が良かったので、あえて物識りとなる努力が不必要だったのかも知れない。表面的な知識しか身につけていない学生には、禅僧のように一喝を与える。そして、丁度この写真に見られるような表情で、ゼミナール室から出ていけなどとうそぶくのである。(ちなみに彼は大の写真嫌い。)

誕生日は4月20日。ヒットラーのと同じ月日である。けれども、ヒットラーとは反対に、平和を尊ぶコスモポリタンで、科学における国際協力ということを常に強調してきた。天文学も分化し、専門専門の新しい雑誌が増えていくなかで、ヨーロッパ大陸諸国の伝統的な天文学誌が Astronomy and Astrophysics 一本に統合された際には、ウンゼルトの努力も相当にあったと思われる。

何でもやり通しそうな彼の意のままにならないこともたまにはある。彼が主任教授をつとめる天文台兼理論物理学研究所のある西独・キール地方の天候である。星が見たければ彼は南フランスか合衆国のカリフォルニアまで出かけて行かなければならない。事實は彼はそうしてきたのである。少なくとも彼の理論を適用できるような良いスペクトルを充分に撮るためには。(小平桂一)

